

次世代へ希望の芽

心療内科医・桑山紀彦さん

「地球のステージ」の公演後、来場者の子どもと手を重ねる桑山紀彦さん。今月11日、神奈川県海老名市、市文化会館



13歳のパレスチナ人の少年が描いた絵はモノクロだった。ミサイルを放つ戦闘機。建物に機銃を撃ち込む

― ぎふ戦後80年 ―

シ平和論

〈10〉

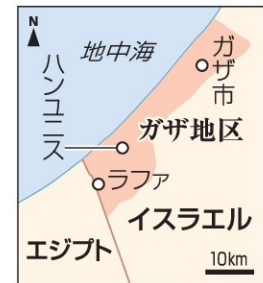
へり。戦車砲は街を向く。2009年、中東のパレスチナ自治区ガザ。エジプト国境の街ラファで心療内科医の桑山紀彦さん(62)＝高山市出身＝は、子どもたちがイスラエル軍の空爆を描く様を見ていた。用意した色鉛筆を使っていない。「あれ？ 色塗っていいんだけど」と問うと、「こたえたという。そんなもの塗らないね。色は自由や平和の象徴だ。爆弾を落とされている僕の街に色なんてものはない」

その少年モハammad・マンスールさんは、壁に弾痕が残る家で育ち、銃撃戦に巻き込まれた父親は下半身が不自由だった。このままではイスラム組織ハマスの戦闘員になると危惧した。桑山さんが代表理事を務めるNPO法人「地球のステージ」は、世界の紛争地や被災地で「心理社会的ケア」に取り組む。描画や映画製作を通じ、命の危機や肉親を失うなどのトラウマ(心的外傷)を負った人たちが過去に向き合い、乗り越える手助けをする。

「癒やされないトラウマは怒りとなり、ちょっとした刺激で火が付き、子どもの世代にまで影響する」痛感したのは1998年、中国の山西省で10代当時旧日本軍兵士から性暴力を受けた女性を診察した

時だった。半世紀以上を経ても、性被害の映像が突如浮かび上がる「フラッシュバック」、黄色い軍服が現れる「悪夢」などPTSD(心的外傷後ストレス障害)に苦しんでいた。暴力の連鎖もみられた。「お母さんは、ある時、狂人になるんだ」。ナタで切りつけられた息子には、首から胸まで傷痕があった。「戦争って、1回やると長いんですよ。ガザ戦争も結局、80年前のあの戦争が終わっていない証だと思っ」。

イスラエルの人権団体すら「ジェノサイド」(集団虐殺)と非難するガザの苛烈な現状にナチスのホロコースト(ユダヤ人の大量虐殺)の影を見る。モハammadさんは出合いの翌年、皆で繰り出した海辺で夢を打ち明けてくれた。ジャーナリストになり、世界にガザを伝えたいという。桑山さんは募金で大学進学を後押しし、卒業後は現地スタッフに迎え入れた。



2023年10月、イスラ

くわやま・のりひこ 1963年、高山市生まれ。NPO法人地球のステージ代表理事で心療内科医。斐太高校、山形大学医学部卒業後、タイ・カンボジア国境の難民キャンプを皮切りに医療支援活動に取り組む。現在はパレスチナ、ウクライナなどで支援事業を展開。09年に宮城県に開所したクリニックでは東日本大震災に被災しながら診療を続けた。16年に神奈川県海老名市に「海老名こころのクリニック」を開設した。

ガザで戦禍に苦しむ心をケア

エル軍とハマスの戦闘が始まると、電気や水道が止まった中で連日、破壊と流血の状況が送られてきた。桑山さんはその中の1枚、がれきの街で猫を抱える男性の写真に涙した。「彼は人の『生』を伝えている」実力が認められ、彼は日本の新聞社の現地通信員に採用された。念願をかなえたが、今年3月、自宅でミサイル攻撃に遭い、死亡する。28歳だった。「この現代に生きて、戦争のトラウマを受けるって何なんだろう」。息子同様に思う桑山さんの悲しみは深い。それでも、「兄はイスラエルを恨んでいない」と口をそろえるモハammadの妹と弟に「一筋の光を見る」「反撃や復讐を語れば、それが戦争をもっと悪くすることを兄は知っている」。ハニユニスに移した事務所は、この2人を含む6人が日の丸のワッペンを胸に心のケアに取り組む。桑山さんはこうした活動を歌声と映像で伝える「地球のステージ」というコンサートを重ねる。今月11日、クリニックと国内事務所がある神奈川県海老名市で4148回目に臨み、幼な子もいる観客席に優しく語りかけた。「戦争の火種は僕ら一人一人の心の中に潜んでいるもんだと思っんです。だったら、平和の芽も僕らの心の中にあるんだろっな」。微力でも、種をまき続ける。(堀尚人) おわり